



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより8月号2012

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



今月の予定

聖歌練習 半田 8月8日(水)12時ごろから

名古屋8月12日代式後。毎聖体礼儀後のミニ練習も行います。

名古屋指揮当番

5日マリア松島 19日ピーメン松島 26日エレナ広石

3. 伝統、「主から渡されたもの」

—すべての中心は「聖体礼儀」—

聖書において「伝統」とは「受け渡すこと」です。聖使徒パウエルは「わたしがあなたがたに伝えた（ここでは手渡す、伝えるという動詞形）ことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り感謝の祈りをささげてそれを割き・・・（Iコリ 11:23）」と語ります。

使徒たちが主から「受けたもの」すなわち

エウカリスティア ミステリオン

感謝の機密（秘跡）、その真理は使徒から教会へ、また教会から教会へと、礼拝、なかななく「聖体礼儀」の場で「そこにいる」主のもとで、聖神（聖霊）の働きによって、顕され、受け渡されてきました。

聖体礼儀の開始時、司祭は宝座（祭壇）の前に立ち、両手を挙げて「至高きには光栄神に帰し、地には平安くだり、人には恵み臨めり（ルカ 2:14）」と祈ります。主の降誕を知らせる天使の

せきしん

歌です。主の藉身（受肉）によって、天と地が結ばれました。救いの始まりです。続いて、輔祭は「主に事を行う時至れり。（今こそ主が働く時）」と唱え、司祭は高らかに「父と子と聖神の国は崇め讃めらる、今も何時も世々に」、今この世に、時を超えた永遠の神の国が介入し、ここに至聖三者（三位一体）の神の国があることを宣言します。聖体礼儀という「乗り物」に乗って、今私たちは「父と子と聖神の国」の宴へと上げられていこうとしているとも言えます。イコノスタス中



中央の王門上の主の晩餐のイコンも、この宴席の主がハリストスご自身であることを表明しています。

エウカリスティア

聖体礼儀の中心は初代教会から続く「感謝」の儀式です。感謝を捧げ、パンとぶどう酒が主の血と体となるよう祈る部分はアナフォラ *ἀναφορά* と呼ばれますが、アナフォラとは「上げられる」という意味のギリシア語です。主の名のもとに集まり祈る教会、地にある教会は上げられて天上の教会と一体となります。信徒の協同の仕事は目に見えない天の教会のメンバーとの協同の仕事に拡大されます。壁一面に描かれた天使や聖人たち、神の母マリアのイコンやフレスコは、目には見えないけれど彼らがここに集っていることを表します。信徒は「聖、聖、聖なるかな、主サワオフ」という預言者イサイヤの聞いた天使の歌を天使とともに歌い、天の宴席に参列しています。

知って祈ろう—奉神礼は面白い

天にいます (天主経)

「天にいます」は主の祈りとも呼ばれ、キリスト教系の学校や幼稚園などでも教えられるので、信徒でなくても多くの人が知っています。

昔は、信徒以外には決して明かされない秘密の祈りだったことをご存じですか。古代教会では洗礼を受ける人は最低3年間は洗礼志願者として教会に通い、大斎前に審査を受けて啓蒙者として登録され、さらに主教直々から毎日数時間旧約聖書を中心とした講義を受け、洗礼日である復活祭の数日前になってやっと「信経」が口移しに教えられ、さらにギリギリになって、やっと「天主経」が授けられました。信徒だけに明かされた秘密の祈りなので書き写すことは許されず、すべてその場で暗記しました。

天主経にはさまざまな解釈がありますが、「聖体礼儀」の流れの中で「ご聖体」を受けることのできる信徒の祈りだったことを念頭に考えるとよく意味がわかります。

天にいます、我等の父や

天の神を「おとうさん」と呼ぶことができるのは、ハリストスによって神と結ばれた信徒だけに許された特別のめぐみです。ハリストスが特別に「こう祈りなさい」と教えてくださいました。日本語の語順ではわかりにくいですが、もともとのアラム語もギリシア語もスラブ語も「とうさん」と呼びかけることばが一番最初にあります。しかも「おとうさま」や「父」ではなく「とうちゃん」といった親しい呼びかけのことばです。

願くは爾の名は聖とせられ爾の国は来たり。爾の旨は天におこなわるるがごとく、地にも行われん。

今ここに、聖体礼儀において、天と地が結ばれて、地上の教会は神の国と一体になりました。ここに集うのは、21世紀の私たちですが、天使や聖人や生神女、ハリストスとともに天の宴席についています。

我が日用の糧を今日我等に与え給え

「日用の糧」は日ごとのパンという意味です。ハリストスは「私はいのちのパン」とあると言われました。私たちは今ご聖体をいただくとしています。その直前にこの祈りを唱えます。ご聖体は私たちがハリストスに従って生きていく上で、どうしても必要な毎日の糧食なのです。

我等に債あるものを我等赦すがごとく、我等の債を赦したまえ。

聖書には祭壇に捧げものをするときには、誰かと仲たがいをしていたら赦しあってから出直しなさいと教えられています(マトフェイ5:23)。

我等を誘いに導かず、なお我等を凶悪より救い給え

「凶悪」とは悪魔のことです。この世には悪魔がたくさんいて、ハリストスの集めた信徒を神さまから引き離そうと虎視眈々とねらっています。

「天にいます」をどう歌う？

ビザンティン時代以来、「信経」と「天にいます」は全員で唱えらるるようになりました。歌うようになったのはロシアに入ってからで、今でもギリシア系教会では「唱え」ます。

「天にいます」にはケドロフのものなど美しい聖歌がたくさんありますが、名古屋では単音にハーモニーをつけたものを全員で歌っています。数年前、ある小学生の女の子が久しぶりに参拝したときに、たまたまその日はチハイ作曲の「二番」の天主経を歌いました。「知らない歌で、一緒に歌えなかった…」とがっかりした顔をしたのが記憶に残っています。

「誰でも参加できる聖歌」を進めてきた名古屋教会では、ここはやはり大人から子どもまで、自分の祈りとして参加できる「天にいます」がふさわしいのではないかと考えます。

参考文献

『奉神礼』トマス・ホブコ著、西日本主教教区発行

『ユーカリスト』A.シュメーマン著、新教出版社

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料